神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

In reminiscence of professor Norberto Bobbio

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 信一郎, Murakami, Shinichiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/607

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

追憶のなかのボッビオ教授

村　上　信一郎

トリノ。この街の基本的な性格はメランコリーだ。真冬の午前中は，この街に特有の駅や煤煙の臭いがたちこめ，それが街角や大通りにまで漂う。朝，この町に着くと，霧で町中が灰色と化し，あの匂いに包まれている。ときおり，霧のなかから，かすかな太陽がにじみでて，積もった雪の塊や葉の落ちた木々の梢を，バラ色やライラックの薄紫色に染めてゆく。遠く消え去りそうなポー川は，真昼でも夕暮れを思わせるスミレ色をした霧の地平の彼方に沈んでいる。どこにいても煤煙の憂鬱で忙しげな，あの臭いがして，列車の音が聞こえてくる。

イタリアの女流作家ナタリア・ギンツブルクは，自分が生まれ育ったトリノを，親しい友人であったチェーザレ・パヴェーゼを追憶するなかで，このように描写した。1950年の夏の終わり，もう少しすれば42歳の誕生日。その一年前には後に代表作といわれるようになる『美しい夏』を上梓し，作家として，またイタリアの知性を代表する出版社であるエイナウディ書店の編集者として，実り多い円熟のときを迎えたかにみえたパヴェーゼの唐突で，あまりにも身勝手な自死。だが，ナタリアは，それを咎めるのではなく，彼が死んだのも，まるでトリノという町のせいであったかのようにいう。パヴェーゼが愛したこの街は，じつは自分たちの喪った友にとてもよく似ていたというのである。眉間に皺をよせて，ただひたむきに一生懸命働きつづけているのに，どこかやるせなく，無為に日々を過ごしたり，夢見がちなところもあるのだ，と。

パヴェーゼがトリノ駅前のホテルで薬物自殺を遂げてから，およそ半世紀あまりが過ぎた2004年の冬，1月9日に，イタリアのみならずヨーロッパにおいても有数の政治哲学者であったノルベルト・ボッビオが，94年にも及ぶ長い人生の幕を下ろした。

じつはパヴェーゼはボッビオの1歳年長で，トリノの名門校マッシモ・ダゼリオ中等・高等学校以来の友人であった。また後にナタリアの夫となるロシア文学者のレオーネ・ギンツブルクは，ウクライナのオデッサの生まれで，ユダヤ系亡命ロシア人の家庭に育った同い年の同級生であった。この3人は，恩師アウグスト・モンティの薫陶を受け，それぞれのやり方で反ファシストの道を歩んでいく。しかし，その後の人生は大きく異なったものとなった。レオーネはすでに60年以上もまえの1944年にローマで獄死している。そしてパヴェーゼの突然の自死。それゆえボッビオが彼とともに過ごした歳月は思いのほか短い。けれどもボッビオは，彼らのことを，まるでトリノの街角の変わらぬ光景であるかのごとく，いつまでも鮮明に記憶しつづけたのである。

ボッビオの亡骸は，彼が1948年からおよそ30年にわたり法哲学や政治哲学を講じてきたトリノ大学の本館に移され，その大講堂で通夜が営まれた。ボッビオは1984年に社会党出身のサンドロ・ペルティーニ大統領によって終身上院議員に任命されていた。そのため，レジスタンスの体験を共有する親友のカルロ・アゼリオ・チャンピ大統領だけではなく，およそボッビオとは正反対の政治的立場をとっていたマルチェッロ・ペーラ上院議員やピエルフェルナンド・カジーニ下院議長も弔問に訪れた。だが，当然のこととはいえ，数多くの弔問客のなかにシルヴィオ・ベルルスコーニ首相の姿はなかった。

ボッビオは，かねがね自分のことを無神論者でもなく不可知論者でもないといっていた。しかし，葬儀は彼の望みで，カトリックの典礼によるものではなく，非宗教的な市民葬として執り行われた。ただ，通夜の席には，ボッビオの願いによって，バッハの「ヨハネ受難曲」が静かに流されていたという。死にいたるほどの疲れを癒してくれるものがあるとするならば，それは

死によって永遠の安らぎを得ることによるしかない。ボッビオが90歳の誕生日を迎えたときのことばであった。

★　★　★　★

次に掲載する文章は，私が初めてボッビオ先生にお目にかかった日のことを，1997年に綴った未発表の原稿である。その後も，先生の自伝の編者であったアルベルト・パプッツィ氏（元エイナウディ書店編集者，当時はトリノ楽友協会会長）のご好意もあって，イタリアにいくたびに，何度となくトリノのお宅を訪ねることになった。1999年のことだが，私がお宅を訪ねた直後，左翼民主党の書記長に就任したばかりのヴァルテル・ヴェルトローニ氏が表敬訪問をするというハプニングもあった。最晩年は車椅子の生活で，本を探しに部屋を移動するときに，私の車椅子の押し方が乱暴すぎて，思わず痛いと叫び声をあげられたこともあった。最愛の奥様を亡くされた後にお目にかかったときには，目に涙をすっと浮かべ，ことあるごとに，悲しい，悲しいとつぶやいておられた。10年前に認めた拙文をここに再録することにより，ささやかではあるが，私の追悼の想いを表するものとさせていただきたい。

知識人と政治――ノルベルト・ボッビオ教授との会話によせて

1994年9月8日「ピエーロ・ゴベッティ研究センター」

あたふたとタクシーに乗り込んだときには，もう午後6時を回っていたであろうか。「せっかくトリーノにまで来てくれたのだから，ぜひ会ってらっしゃいよ」。カルラ・ゴベッティの有無を言わせぬ勧めにより，思いもかけず私がノルベルト・ボッビオの自宅を訪ねることになったのは1994年9月8日のことであった。

ボッビオは，1909年トリーノに生まれた今世紀のイタリアを代表する政治哲学者である。1934年に教壇に立って以来50年にわたりトリーノ大学法学部，政治学部を中心として法哲学や政治哲学を講じたのち，1984年にはペルティー

ニ大統領によって終身上院議員に任命され，85歳の当時も，その3年後の現在においてもなお意欲的な言論・著作活動を展開している（唯一の邦訳に『イタリア・イデオロギー』［馬場康男・押場靖志訳，未来社，1993年］がある。また詳しい経歴や著作については，上村忠男による本書の解説を参照されたい。今年，1997年になってからも，『老いについて』［エイナウディ社］，『自伝』［ラテルツァ社］，『ファシズムから民主主義へ』［バルディーニ＆カストルディ社］と著作の刊行が相次ぎ，その発言も今なお社会の注目を集めつづけている）。

ところで，カルラは夫のパオロとともに「ピエーロ・ゴベッティ研究センター」を運営していた。ピエーロ・ゴベッティは1901年の生まれで，ボッビオより8歳年長であった。しかし弱冠17歳にして政治・文芸評論誌『エネルジーエ・ヌオーヴェ（新しいエネルギー）』を刊行し，のちに工場占拠運動を支援し共産党を創設することになるアントニオ・グラムシなどの青年革命家たちによって1919年に創刊された『オルディネ・ヌオーヴォ（新しい秩序）』誌にも演劇評論を寄稿するなど，ボッビオが中学校に入る頃には，すでにその早熟な才能を開花させていた。そして1922年からは『リヴォルツィオーネ・リベラーレ（自由主義革命）』誌を刊行し，ファシズムを真の精神的・道徳的革新を欠いたまま長くシニシズムとエゴイズムに蝕まれてきた「イタリア国民の自叙伝」であるとして徹底的に批判しつづけた。1926年には出版停止命令を受けたためパリに亡命するが，病に倒れその直後24歳で客死する。

じつはボッビオが通った名門校マッシモ・ダゼリオ中高等学校時代の恩師アウグスト・モンティも，ゴベッティの熱心な協力者であった。モンティはそのために1932年に免職となる。しかしその後も反ファシスト地下運動「正義と自由」を組織しつづけたため，逮捕・投獄が繰り返された。そしてレジスタンスでは国民解放委員会における行動党の代表の一人となっている。

彼のもとからは，ボッビオの親友でもあったロシア文学者のレオーネ・ギンズブルグ（幼児期にトリーノに移住したロシア系ユダヤ人で，投獄・流刑

ののちレジスタンスに参加して再逮捕，1944年に獄死。作家のナタリアはその妻，歴史家のカルロはその息子)，同様にボッビオの幼なじみであり，『美しい夏』などの作品で知られる作家のチェーザレ・パヴェーゼ（彼も1935年に流刑。1950年自殺)，ボッビオより1歳年下だが，これまた投獄やレジスタンス闘争をへて，戦後長らく労働総同盟の書記長や社会党代議士を務め，現在もなお左翼民主党系の上院議員であるヴィットーリオ・フォア，ボッビオよりも7歳年長だが，イタリア南部の流刑地での体験をもとにした小説『キリストはエボリに止まりぬ』で有名な画家カルロ・レーヴィ（1975年没）など，戦後イタリア文化を代表する幾多の才能が巣立っていった。

話を元に戻すと，私が会ったカルラの夫パオロは，今述べたピエーロ・ゴベッティの遺児であった。そして行動党のメンバーとして反ファシズム武装闘争に参加した母アーダとともに，父の遺志を継ぐために，1961年，ファブロ通6番地の彼らの家に「ゴベッティ研究センター」を設立した（アーダ・ゴベッティ『パルチザン日記（1943-1945年)』［堤康徳訳，平凡社，1995年］の戸田三三冬による解説を参照)。またボッビオはというと，長くその所長を務めていた。そんな経緯もあって，たまたま「ゴベッティ研究センター」を訪れたにすぎない私が，遠来の客に最高のもてなしをしたいというカルラの好意により，老碩学の自宅を訪問するという思いがけない栄誉を得ることになったのである。

ボッビオ教授・トリーノ・反ファシズム

ボッビオ教授の自宅は，トリーノ駅に至る鉄道沿いに続くサッキ通66番地の古びたアパートの最上階にあった。この家は教授が生まれ育った家でもある。ということは，教授はじつに90年近くものあいだ，ここに住みつづけていることになる。若かったころ，マルケ州のカメリーノ大学，トスカーナ州のシエナ大学，ヴェネト州のパドヴァ大学に赴任したときも，居を移すことなくホテル住まいを続けた（イタリアではそのこと自体さほど珍しいことで

はない)。

したがってボッビオ教授の生涯は，アルプスの麓に位置し，サヴォイア家のかつての王宮があり，アネッリ一族が1899年に創業し，イタリア最大の民間企業にして自動車会社となったフィアットの工場が立ち並ぶ，まさにトリーノという都市の環境や文化と切り離せないものであった（日本のように，機会の獲得や社会的上昇に応じて中央へと移動していくのではなく，たとえば，かつてはイタリアを代表する大哲学者ベネデット・クローチェが終生ナポリに住みつづけたごとく，自分が生まれ育った地域や都市の環境や文化に，こうした愛着やこだわりを抱きつつ，世界とかかわり続けることが，イタリアの知識人の最大の特徴のひとつであるといえよう)。

ところでボッビオは，「知識人としての自伝」(『老いについて』前掲書，所収）において，「わたくしの公の人生は，外から見る限りあまりにも平凡すぎるものなので，お話するほどの値打ちはありません」と述べている。父ルイージはサン・ジョヴァンニ病院の外科部長を務める裕福な医師であった。1925年というから，ボッビオが高校生の頃には，自動車を２台も持ち，２人の召使いと１人のお抱え運転手がいた。そして，休暇ともなれば田舎の別荘で過ごすという，典型的な中産ブルジョワ市民階級の家庭に育ったのである。

こうした家庭の子供にとって，高校，大学へと進学することは，ごく当然の成り行きであった（２歳年上の兄も大学に進学し，パルマ大学医学部教授となった)。そして研究者の道を選んでからは，学会や講演に出かけるとき以外は，ほとんど書斎の椅子に座りっぱなしの毎日を過ごしてきた。また幸せな結婚をし，家庭生活にも恵まれている。「要するに，読んだ本や書いた著書をとおして自分の人生に区切りをつけていくのが，研究者としてのありふれた暮らしぶりだとすると，それ以外には，お話するようなことは何ひとつないのです。ヨーロッパの歴史のなかでも，最も劇的なひとつの時代に生きてきたことを考えれば，おおむね平穏な人生でした」。

しかしボッビオの生涯は，彼がいうほど平穏なものではなかった。という

のも，彼の生きた20世紀という時代がそれを許さなかったからである。事実，1935年5月15日には，「正義と自由（ジュスティツィア・エ・リベルタ）」（パリに本拠を置く反ファシスト地下組織）の秘密集会に通っていたとの疑いで，パヴェーゼ，フォア，レーヴィらとともに一斉検挙にあった（もっともフォアのように本格的な非合法活動をしていたわけではなく，7日間の拘留後，午後9時から午前6時までの外出禁止命令を受けただけで釈放となった。他方，フォアのほうは，特別裁判所から禁固15年の判決を受けることになる）。

だがボッビオはその後も，当時赴任中のカメリーノから，ピサ高等師範学校を拠点として1937年グイド・カロージェロとアルド・カピターニが結成した地下組織「自由社会主義（ソチアリズモ・リベラーレ）」に参加しつづけた。さらに1942年10月には，トレヴィーゾでの「行動党」ヴェネト支部設立集会に，パドヴァ代表として参加している（そのころボッビオはパドヴァ大学正教授となっていた）。

そして，1943年12月6日，ついにパドヴァで逮捕されてしまった。すでにこの年の7月25日には，ファシズム大評議会によってムッソリーニが解任され，ファシズム体制は崩壊していた。しかし，ドイツ軍によって救出されたムッソリーニは，9月23日ガルダ湖畔サロに「イタリア社会共和国」（通称サロ共和国）を樹立し，ナチ・ドイツの庇護下に，あらためてサレルノ以北のイタリアを支配していた。その翌年の年1月11日，ヴェローナでは，ムッソリーニの女婿チャーノをも含む5人のファシスト「反逆者」が，銃殺刑に処せられた。ボッビオは，このように混乱し殺気だったサロ共和国の警察によって逮捕され，しかも残虐な復讐の舞台となったヴェローナの刑務所に，裁判もないまま3ヵ月間も投獄されたのである。

じつはボッビオは，1943年4月に結婚していた。そして，逮捕のとき，新妻のヴァレリアは妊娠中であった。結局は，1944年2月末に釈放されたため，事なきをえたが（長男ルイージは釈放の2週間後に無事誕生した），この一事をもってしても，彼の人生が平穏どころではなかったことは，明らかであった。彼が遠慮がちに，自分の人生は平穏だったといったのは，おそらくは，

数多くの友人や仲間が，ファシズムとの闘いの中で命を落としていったことを思いやってのことであろう。だが，決してボッビオ一人が安穏とした生活を送っていたわけではなかった。本質的には書斎の人であった彼のような人でさえもが（事実「わたしたちは陰謀家を志願していましたが，陰謀なき陰謀家といったようなものでした」と自嘲気味に『自伝』でふりかえっている），こうした時代には，ちょっとした運命の悪戯で犠牲者となるということも，十分にありえたのである。

《ボッビオ事件（イル・カーゾ・ボッビオ）》

ところで『自伝』には，ボッビオがこともあろうに「政府首班ムッソリーニ騎士閣下」に宛てた1935年７月８日付の手紙が，再録されている。この日付は，先述した一斉検挙の２ヶ月ほどのちに当たる。ボッビオは，自分が陸軍中将と准将の２人の叔父をもつ，愛国的かつファシスト的な家庭環境に育ち，1928年に大学に入学して以来，模範的な国民ファシスト党員にしてファシスト大学生団員である。５月の検挙についても，その嫌疑は十分に晴らされたはずである（「非ファシストとの交友」といっても，「わたくしの同窓生や同級生である以上，彼らとは付き合わざるをえませんでした」）。それにもかかわらず，今回の行為が予防警告措置に相当するものであるとして，県当局から出頭命令を受けたことは，理解に苦しむ。こう述べたうえで，次のように結んでいた。「かような告発は，わたくしのファシストとしての良心を深く傷つけるものであるということを，衷心より申し上げるものであります」。

この手紙は，60年近くもたって国立中央文書館所蔵の内務省公安警察庁資料から発掘され，週刊誌『パノラマ』（1992年６月21日号）に掲載された。記事は「文字どおりに」と題され，ボッビオの手紙の他にも，パヴェーゼがムッソリーニに恭順の意を表明した２通の手紙や，ジューリオ・エイナウディが1935年事件の尋問中に被疑者の幾人かが反ファシストだと供述した調書を暴露することにより，反ファシスト知識人がいかにファシスト体制側にすり

寄ろうとしていたかを，明らかにしようとしたものであった。

この《事件》について『自伝』はこう記している。「わたしは，この手紙の中で，突如として，永遠に打ち勝ったと思い込んできたもう一人のわたしと向き合うことになりました。わたしの人格をめぐる論争ではなく，その手紙そのものと，それを書いたという事実それ自体に，わたしは打ちのめされたのです。それはある意味では，ひとつの官僚的な手続きであって，他ならぬファシスト警察が勧めたものでした。しかし，たとえそうであったにせよ，《統領(ドゥーチェ)に手紙を書いてみたら》というのは，屈辱への呼びかけだったのです」。

ボッビオと同い年の著名な哲学者エウジェーニオ・ガレン――邦訳には『イタリア・ルネサンス文化における市民生活と科学・魔術』［清水純一郎訳，岩波書店，1975年］がある――は，『レプッブリカ』紙のインタビューに答えて，「とくに若者たちのなかでイタリアに止まることを選んだものは，その選択から生じるすべての結果を，引き受けなければなりませんでした。たとえ心の中では体制に反対であっても，たとえ体制打倒の試みに非合法的な形で加わっていたとしても，表向きには，その活動がつづけられるような態度を取らなければなりませんでした」と述べ，ボッビオを擁護した。

また，ボッビオよりは11歳も年下だが，レジスタンスにも参加した著名なジャーナリストのジョルジョ・ボッカ――現在も週刊誌『エスプレッソ』に「反イタリア人(アンティタリアーノ)」というコラムを連載中である――も，「あの連中は，独裁がどんなものだか，まるで分かっていない。わたしだって，同じような条件でならば，統領(ドゥーチェ)に手紙を書いていただろう。それも１通ではなくて，10通は」と述べていた。

そして，1935年の一斉検挙で禁固15年に処せられたフォアも「ファシストであることと，ファシスト党員であることとは別物でした。わたしの多くの友人や，兄でさえも，往々にして反ファシスト的な態度を隠さなかったにもかかわらず，ファシスト党には入党していました。党員証は，多くの場合，自分の能力にふさわしい仕事にありつくために必要な条件であり，ときには

たんに仕事にありつくためだけでも，必要な条件だったのです」と述べたうえで，「この手紙は，政治的ないし道徳的なあらゆる観点からみても，まったく取るに足らないものだと，まずはいっておきたい。予防警告措置というのは彼に対する暴力あり，その人格的自由と旅行や労働の能力を制限しようとする行政措置でした。そのような暴力から自衛する権利は，ボッビオにだってあったはずです。正当防衛といってもよいぐらいなのです」といって，彼に深い同情と理解を示した。

いうまでもなく，これらの人々は左翼の陣営に属する人々であった。イタリアの戦後政治体制に正統性を与えてきた反ファシズムの理念と価値とを，何はともあれ擁護したいと考える人々であった。

他方，週刊誌『パノラマ』編集部の意図が，こうした反ファシズムの《神話》の破壊にあったことは明白であった（事実，この週刊誌は，このときすでに，1994年3月27-28日総選挙に右翼連合を率いて歴史的な勝利を収めて「第一共和制（ラ・プリマ・レプッブリカ）」を打倒することになる，「メディアの帝王」シルヴィオ・ベルルスコーニが所有するイタリア第2の民間企業グループ「フィニンヴェスト」系列の出版社モンダドーリ社の傘下に入っていた）。

彼らにいわせれば，それまで反ファシズムの《神話》を強力に支えてきた政治勢力は，何といってイタリア共産党であった。しかし，東欧社会主義体制の崩壊後，1991年1月にイタリア共産党がマルクス・レーニン主義を放棄して左翼民主党へと大転換を遂げたことにより，少なくとも名義上は共産党という最大の反ファシスト勢力は消滅した。ところが，レジスタンス期の「正義と自由」運動や「行動党」に起源をもつ急進民主主義的な知識人，すなわち「尊敬に値する人々（リスペッタービレ）」の反ファシズムは，いぜんとして大きな影響力を持ちつづけていた。そこで『パノラマ』がとった戦略は，こうした「尊敬に値する人々」の《偶像破壊》であった。

反ファシズムの理念や価値そのものを，歴史的に問い直すというのであれば，この戦略にもそれなりの意義があったであろう。だが，それは一見，史

料実証主義的な手続きを踏まえるかのように見せかけながら，その実，歴史的な文脈を意図的に隠蔽しつつ，たった1枚の文書を，さも裏切りの決定的な証拠であるかのごとく読者に提示することによって，一人の誠実な知識人の名誉を葬り去ろうとする，ある意味ではもっとも卑劣な手法であった。また，それは歴史修正主義が好んで用いる手法でもあった。そして，その最大の標的となり餌食となったのが，ボッビオ教授だったのである。

歴史修正主義（レヴィジョニズモ・ストーリコ）

ボッビオ教授は，最近の歴史修正主義について，こう述べている。「とても残念なことに，わたしの仄聞するところ，反共産主義の名のもとに［共産主義者が支持してきたという理由で—引用者注］反ファシズムを拒否することが，たいていの場合，結局は，わたしのいちばん嫌いな，ファシズムと反ファシズムとを等距離に見るという，もうひとつ別の立場へとつながってしまっているようです」。

「こうした立場は，民主主義の再建が始まった直後に，ファシズムも反ファシズムも乗り越えなければならないと説いた人々に，起源をもっています。けれども，このようにファシズムと反ファシズムを等距離に見るという立場は，警察国家と法治国家の違いや，たとえナチほど残虐ではなかったとはいえ，独裁体制と「第一共和制」のようによろよろした（いかんせん，いまだによろめき続けている）民主主義体制との違いを，若い世代の人々が理解することを，最初から封じてしまっているのです。また，ファシズムが，第一次世界大戦後のヨーロッパの中心を制圧した初めての独裁体制であり，たとえ強力な同盟国に従属していたとはいえ，悲劇的な敗北に終わる第二次世界大戦を引き起こした元凶であり，長いあいだ文明国の一員であったこの国の歴史にとっては，まさに屈辱でしかなかったということを，理解できなくしてしまっているのです」。

「わたしたちは，少数の人々のやりたい放題の横暴と，たとえ強制された

とはいえ，またつねに我慢していたわけではなかったとはいえ，大多数の人々の服従のせいで，この国が支払わなければならなかった大きな代償を，とことんまで理解することができるようになったときに初めて，こうした屈辱からも解放されることになるでしょう」(「わたし自身に」『老いについて』前掲書，所収)。

歴史修正主義といえば，歴史家レンツォ・デ・フェリーチェの名前をあげないわけにはいかない。彼は総計6,000ページを越える記念碑的なムッソリーニ伝を著したローマ大学文学部教授で，1996年5月25日に67歳で亡くなった。その死に際しては，スカルファロ大統領を始めとして政界，学界から数多くの弔辞が寄せられ，まさに国民的な歴史家として惜しまれて逝った。

しかし，彼はファシズムという一般概念を拒否する，頑強な歴史修正主義者であった。イタリアのファシズムには，人種主義的な反ユダヤ主義はなかったとして，とくにドイツのナチズムとの根本的な違いを強調した。彼の考えでは，《真のファシズム》はイタリアにしかなかった。その本質は，フランス革命に淵源する啓蒙主義的な《進歩》の理念をもつ「左翼全体主義」であり，「生命力論的(ヴァイタリスティック)なオプチミズム」に彩られていた。他方，ナチズムはロマン主義的な過去への回帰を目指す「右翼全体主義」であり，「悲劇的なペシミズム」に支配されていた。それゆえ，1936年の「ローマ・ベルリン枢軸」や1940年の「日独伊三国同盟」も，これらの国々の政治体制のイデオロギー的な同質性から必然的となったものではなく，たまたま利害が一致しただけの偶然的な性格をもつものにすぎないとした。このようにして，ファシズムという一般概念のみならず，その国際的な類似性をも明確に否定していたのである。

そして近年においては，ファシズム体制がイタリアの国家機構や社会生活にもたらした一種の「近代化効果」を強調するとともに，この体制を「イタリアの自由主義体制にあった権威主義的伝統が《硬直化》したもの」ととらえることにより，イタリアの一国史的な連続性に力点を移すようになってい

た（邦訳には『ファシズム論』［藤沢道郎・本川誠二訳，平凡社，1973年］，『ファシズムを語る』［西川知一・村上信一郎訳，ミネルヴァ書房，1979年］がある）。

デ・フェリーチェは死の前年に『赤と黒』［バルディーニ＆カストルディ社，1995年］という小さな本を出していた。だがこれは，反ファシズムを否定するためだけに書かれた，といってもいいすぎではないような本であった。カトリック教会公認ラテン語訳聖書を「ヴルガータ」というが，彼は《レジスタンス》が戦後政治体制を支配した共産主義者とカトリック教徒（より正確にはキリスト教民主党）によってでっちあげられたイデオロギー的な《神話》にすぎなかったとし，それを「ヴルガータ・レジステンツィアーレ」すなわち「公認レジスタンス史学」と呼んで激しく攻撃した。

彼は，レジスタンス，すなわち武装パルチザン闘争が，よくいわれるような「大衆的な民衆運動」などではなく，北中部の人口にして10％足らず人々がかかわったにすぎない，少数者の闘いだったという。大多数の人々は「なにはともあれ生きること」にしか関心がなく，それが当時のイタリアの本当の姿であった。しかも，レジスタンスはドイツ軍に対する「国民解放戦争」ではなく，その本質は，むしろイタリア人が敵味方に分かれて殺しあう「内戦」にあった。

デ・フェリーチェは，連合軍との休戦条約が公表された1943年９月８日以降の政治的空白と「内戦」こそが，その後のイタリアの「民族的アイデンティティ」の崩壊や道徳的頽廃の根本原因であるとする。戦後のイタリア共和国では，こうした真空状態を，共産主義とカトリシズムのイデオロギーが埋めることになった。だが，それによっては失われた「民族的アイデンティティ」が回復するわけはなく，かえって道徳的頽廃は深まっていく。その結果，底無しの政治腐敗や，北部同盟による分離主義運動の台頭に示されるような，癒しがたい民族的危機へとつながっていったとした。

だが，デ・フェリーチェ一人がこうした見解を抱いていたわけではなかっ

た。一例をあげると，1993年９月15-18日にトリエステで「イタリアにおける民族と民族性」というシンポジウムが開かれた。主催者はフィレンツェ大学教授で共和党から首相や上院議長などを歴任したジョヴァンニ・スパドリーニであり，デ・フェリーチェも参加していた（同名の報告集はラテルツァ社，1994年）。だが，もっとも注目すべきことは，報告の内容もさることながら，わざわざその日程の１日を割いて元イタリア領・現クロアチア領イストリアのロヴィーニョにまで会場を移し，現地の歴史研究センター所長を招いてイタリア文化の保存や普及の現状について話を聞くという，かつてのイレデンティズモ（失地回復運動）を彷彿とさせかねない，民族主義的な《パフォーマンス》であった。

そして，これには，スパドリーニ（1925年生まれ）やデ・フェリーチェ（1929年生まれ）の世代の保守的な知識人のみならず，1940年代生まれのどちらかといえば左翼的とみなされてきた比較的若い知識人も加わっていた。ペルージア大学政治学部教授で『コリエレ・デッラ・セーラ』紙のコラムニストでもあるエルネスト・ガッリ・デッラ・ロッジャ（1942年生まれ）も，その一人であった。「祖国の死――第二次大戦後における民族理念の危機」と題する報告を行い，デ・フェリーチェと同様の戦後政治観を表明していた（同名の著書はラテルツァ社，1996年）。

またボッビオの教え子で，著書『もし我々がひとつの民族であることを止めるならば』（ムリーノ社，1993年）が，ベスト・セラーとなったトリーノ大学政治学部教授ジャン・エンリコ・ルスコーニも加わっていた。ルスコーニは新著『レジスタンスとポスト・ファシズム』（ムリーノ社，1995年）で，こう問いかけていた。「今日のイタリアにおいて民主主義者であるためには，まだ反ファシストであらねばならないのであろうか。レジスタンスに依拠することが，まだ我々の民主主義にとっては重要であり，意味をもつものなのであろうか」。

たしかに，若い世代の論者は，「ポスト冷戦」時代の開幕や「第一共和制」

の崩壊という新しい時代状況に即した，周到な議論を展開していた。だが，ボッビオにとっては，おそらく同じことであった。なぜならば，ファシズムと反ファシズムとを「等距離に」見ようとする点では，何ひとつ変わりがなかったからである。このように，ボッビオの信念を真っ向から否定するような議論が，すでにその足元にまで，及びはじめていたのである。

いやな感じ（アリア・チニカ）

ボッビオ教授の書斎は，天井が高く，かなり広かった。壁面をとり囲み天井にまで届く書棚には，書斎にはありがちな装飾的な背表紙の豪華本が整然と並んでいたわけではなく，ありきたりの書物がただぎっしりと詰まっていただけなので，とりたてて立派な書斎という印象は受けなかった。しかし，だからこそ逆に，85歳という高齢にもかかわらず，教授が，現にまだここで仕事をしているのだという雰囲気は，強く伝わってきたのである。

最初の話題はやはり，その年（1994年）の総選挙とベルルスコーニ政権の誕生についてであった。私もこの総選挙については，たくさんのコメントを発表してきた。しかし，いちばん困っていたことは，この政権の性格づけであった。ジャーナリズムでは（そして私も）ベルルスコーニ政権を，一応「右派」ないし「右翼」政権と呼んでいた。だが，はたしてそれでよかったのであろうか。

たしかに，ベルルスコーニは「左翼」政権の誕生阻止を至上命題として政界にデビューした。そして（すでに共産党は消滅したにもかかわらず）「共産党」政権が誕生すると，イタリアが「自由なき収容所列島」になってしまうと説いて回っていた。だが，私が見たところ，彼は確信的な右翼でも反共主義者でもなかった（事実，その選挙公約は，私も「遅れてきたレーガノミックス」と名づけたように，明らかに新自由主義的なものであった）。それにもかかわらず，彼は「反共」宣伝に終始した。なぜか。それは彼の駆使した「マーケティング調査」のデータが，「反共」は今なお世論操作にはいちばん

有用なシンボルであるという結果を，示していたからである。

私は，こうしたシニシズムに，何ともいいようのない「いやな感じ」を抱いていた。彼に好意的な一部の論者がいうような「ポスト冷戦的な」新しさや爽やかさなど，みじんも感じなかったのである。彼にとっては，イデオロギーや信念体系の中身など，どうでもよかった。そんなものから自由だからこそ，選挙戦略の必要に応じて，そのつど有用なシンボルをシニカルに選べばよかったのである。

いいかえると，ベルルスコーニ政権とともに生じたのは，「右傾化」というよりは，むしろイデオロギーの「真空状態」であった。それゆえ，思想的にはまるでパンドラの箱が開けられたような，何でもありの状態が生まれることになった。だが，そこに噴出してきたのは，もはや左翼的な諸潮流ではなく，もっぱら戦後「民主主義」体制のもとで「抑圧」されつけてきた右翼的（反動的）諸潮流であった。

ボッビオ教授も，新政権に戦後初めてネオ・ファシストが５人も入閣したことにショックを隠さなかった。しかし，キリスト教民主党の解体によって，すでに克服されたかに見えたカトリック非妥協主義（あるいはインテグラリズム）の潮流までもが息を吹き返してきたことに，もっと大きなショックを受けたといった。教授がいったのは，まずは弱冠31歳で史上初の女性の下院議長となったイレーネ・ピヴェッティのことであった。彼女は分離主義を唱える北部同盟（レガ・ノルド）の出身でありながら，フランスで1793年にカトリック王党派が起こしたヴァンデーの反乱に因んだ十字架をつねに胸にし，下院議事堂の礼拝室でミサを立て，８月にリミニで開かれるカトリック原理主義運動（インテグリズモ）「共生と解放（コムニオーネ・エ・リベラツィオーネ）」の「人民友好祭（フェスタ・デラミチツィアーポポラーレ）」に出席して，フランス革命以降の無神論が諸悪の根源であると演説していた。

そして，次はロッコ・ブッティリオーネ（1948年生まれ）であった。彼は1993年７月キリスト教民主党がイタリア人民党へと改称されたときに，幹事長となった。彼はアブルッツォ州にあるテラーモ大学の政治哲学の教授であっ

たが，それまではカトリック系学界の主流派とも無縁で，むしろ異端的な「共生と解放」のイデオローグとして知られていた。彼の唯一最大の《資源》は，その伝記を書いたことから生まれた，教皇ヨハネ・パウロ二世との個人的な信頼関係であった（教皇も「共生と解放」の熱心な擁護者であった）。教授は，こんな時代錯誤的で凡庸なカトリック原理主義者が，政界の表舞台に登場することになるとは，夢にも思わなかったと述懐した。

ブッティリオーネの恩師でカトリック思想家のアウグスト・デル・ノーチェ（1910–89年）は，じつはボッビオの高校時代の同級生であり，60年代末にトリエステ大学に職を得るまでトリーノに暮らしつづけた。デル・ノーチェはマルクスをも含む様々な思想遍歴をへたのち，神なき「近代世界」をデカダンスへの不可避的な過程とみなすジョゼフ・ド・メーストル（1753–1821年）らの伝統主義的な反動的カトリック思想に，たどり着く。そして，キリスト教民主主義思想や，第二ヴァチカン公会議（1962–65年）以降のカトリック教会の「現代化」を，無神論的な「近代」に屈服し，教会の伝統を否定するものであるとして厳しく批判した。またマルクス主義や革命やファシズムについても，こうした立場から，神なき時代に生じた逸脱であるとする独自の見解を展開した。

ボッビオ教授は，デル・ノーチェとは親しくはなかったが，手紙のやりとりは卒業後も続いたといった。しかし，どんな人物だったのかと私が尋ねても，あまり話題にしたくないような様子で，それには答えなかった。そして，「たしかにトリーノは，20世紀になると，イタリアではいちばん科学的実証主義が根をおろした進歩的な都市でした。けれども，18世紀の終わりごろにはド・メーストルがサヴォイア王家の顧問を務めたり，1848年にはネオ・グエルフィズモ［ローマ教皇を中心とした君主連合によるイタリア統一論］を唱えるヴィンチェンツォ・ジョベルティ（1801–52年）のような司祭が首相となったこともある，じつはカトリック伝統主義思想が考える以上に根強い影響力をもった都市でもあったのです」と，淋しそうな表情で，まるで言い

訳をするかのように，呟いたのである。

そのあとで，私はカルラがくれたジュゼッペ・ドッセッティの手紙の写しを教授に見せた。ドッセッティは1913年の生まれで，ミラノ・カトリック大学の教会法の講師を務めたのち，カトリックの隊列からパルチザン闘争に参加した。そして，戦後の憲法制定会議において，イタリア共和国憲法の草案作成に重要な役割を果たす一方，キリスト教民主党左派のリーダーともなった。しかし，1951年，突如として政界を引退し，その後は修道士として隠遁生活を送っていた。その彼が，総選挙後の「国民解放記念日」（毎年４月25日）をまえにした４月16日，体調が悪く，もう最後の機会になるかも知れないとして，自分が顧問をしていたボローニャ市長宛てに，憲法の擁護を訴える悲壮な手紙を書き送っていた。ベルルスコーニ政権の誕生は，それほどまでに大きな危機感を掻き立てていたのである。

教授も，この手紙のことは知っていたといい，ドッセッティに賛意を示しつつ，近年の憲法改正論議には，まったく肯けないとした。

「それは，一つには，この憲法が敗戦後のイタリアに民主主義を再建するための決定的な第一歩を印したものであり，その基本的な価値は今でも何一つ変わっていないからです。二つには，いま議論されているいろいろな改革は――政権の安定と強化，行政的非能率の改善，地方分権や連邦制などなど――どれをとってみても，憲法改正などなくても，政治家にやる気さえあれば，すぐにでも実現できるものであるからです。三つには，国民の意識やモラルが変わらないのに，憲法を変えるだけで，一夜にしてイタリアが良くなるというのは，むしろ幻滅しか生みださない，危険な幻想だからです」。

「膨大な政府の赤字を，地道に減らすことさえできないような政治家に，はたして憲法改正などできると信じられますか。北部同盟から入閣したフランチェスコ・スペローニ制度改革相が，国号を《イタリア連合（ウニオーネ・ディターリア）》に変えるよう提案したことが象徴的に示しているように，憲法改正や制度改革論議は，イデオロギーによって原理的な差異がつけられなくなった時代に，他党派と

の違いを際立たせようとして弄ばれる，空虚な言葉の遊びとなってしまっているのです」。

教授はこう述べたあとで，次のようにいった。「イタリアの［政治的］自由主義は，この総選挙で三度目の敗北を喫しました。一度目はいうまでもなくファシズムによってです。二度目はキリスト教民主党によってです。そして三度目はベルルスコーニによってです」。

教授が，いいようもなく淋しそうな表情になってしまったので，私は思わず，どこかに希望はないものでしょうか，ここに来るまえに，フィレンツェでイギリス人の現代史家ポール・ギンズボーグに会ったのですが，彼は今度左翼民主党書記長になったマッシモ・ダレーマのことを結構高く買っていましたよ，左翼民主党についてはどうでしょうかなどと，たてつづけに幾つもの質問をしてしまった。

しかし，教授はアームチェアに深く腰をおろし，じっと私の目を見つめたまま，静かに首を横にふるだけであった。

戦う知識人ボッビオ

ボッビオ教授はこう書いている。「統一イタリアの歴史は，全体をとおして見れば，自由主義的な諸制度の強化と民主主義的な基盤の拡大へとつながっていくゆっくりとした進歩と，大半の知識人の反民主主義的な態度とのコントラストが，その際立った特徴であったように思われる」。彼は，イタリアの知識人の多くが，政治制度や社会構造における小さいが着実な「進歩」を見過ごすばかりか，こうした「進歩」を卑小で些細なこととして露骨に軽蔑する一方，自分たちの壮大かもしれないが，じつに手前勝手な「神話」や「情熱」や「夢」を煽って大衆を引きずりまわしたあげく，熱が冷めると自分たちの責任はそっちのけにして大衆のせいにし，さっさと保身を図っていくのがつねであったと，手厳しく批判した。

また，こうも述べている。「止まっているように見えるほど慎重な足取り

で，前に進んでゆく保守主義者の方が，自分ではやりもしない新奇な革命を，たちどころにひねり出してみせる偶像破壊者よりも，私は好きだ。自分の家の足元を見すえた政治を標榜する人間の方が，《偉大な政治》を説いて，結局は大きな破局を招きよせるような人間よりも，私には好ましい」。

そして，「民主主義というのは，紛争が暴力に訴えることを必要とせず解決されることを可能とするような規則が存在し，また，そうした規則を遵守することを特徴とする統治形態であり，たとえ不完全であるにせよ，各人の自由が全員の自由と両立するような，理想的な社会を予告するものであるとするならば，それは我々にとっての運命である。我々は，たとえこれに背こうとも，それを免れることはできないのである」。（以上は『イタリア・イデオロギー』［前掲書］「後書き」より引用）。

このようにボッビオは，たとえ形式的といわれ，形骸化したといわれようとも，統治形態としての民主主義を，我々が免れることのできない「運命」として絶対的に擁護した（ただし「民主主義は，たとえ勝利したとしても，その勝利は最終的なものではない。世俗的で（神話的－宗教的ではない），自由主義的にして現実主義的な（全体主義がかっていたり，ユートピア的であったりはしない）歴史観には，最終的なるものなど何一つとしてないのである」［「いとまごい」『自伝』前掲書，所収］と付け加えることも忘れなかった）。こうしたボッビオの信念は，ファシスト独裁に対して敢然と「自由」を擁護したベネデット・クローチェを彷彿とさせる。私にはボッビオが，このポスト・モダンといわれるシニカルな時代に，生涯をかけて「啓蒙」の精神を全うしようとする，今世紀最後の「戦う知識人」のひとりであると思われてならないのである。